

平成30年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 松ヶ江南 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

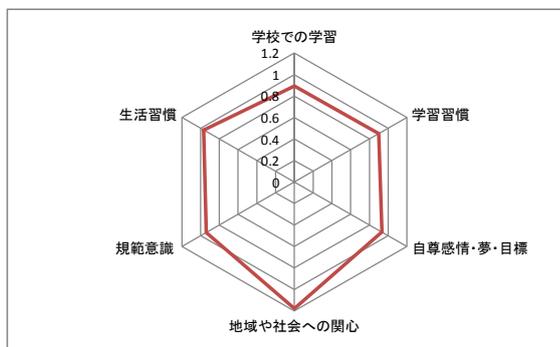
(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率								
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率をわずかに下回っているが、無解答率は、全問とも全国より低く、回答意欲が感じられる。 ・漢字の読み書きについては、昨年度より向上した。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・読むことに関する正答率は全国平均正答率と同程度であった。	
	努力が必要な問題	・相手や場面に応じて適切に敬語を使う問題に課題が見られた。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	・下位層の割合は、全国と同程度であるが、上位層の割合がやや低い。「話すこと・聞くこと」・「書くこと」・「読むこと」の領域で全国平均を若干下回っている。基礎的・基本的な内容の確実な定着化とともに、それらを活用しながら考えを上げたり深めたりするような授業を更に展開していく必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・目的に応じて、複数の本や文章などを選んで読む問題の正答率は、全国平均正答率より高かった。	
	努力が必要な問題	・目的や意図に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしなが読む問題に課題が見られた。	
算数A	全体的な傾向や特徴など	・下位層の割合は全国と同程度で、中位層の割合は高く、上位層の割合が低い。無解答率は、1問を除いて全国平均より低く、何らかの回答をしようとしている。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・円周率を求める式として正しいものを選ぶ問題の正答率は、全国平均正答率より高かった。	
	努力が必要な問題	・直径の長さと同周の長さの関係の問題の正答率が、全国平均正答率より特に低かった。 ・分度器の目盛を読み、180°よりも大きい角の大きさを求める問題の正答率が全国より低かった。	
算数B	全体的な傾向や特徴など	・「図形」領域が、全国平均正答率を下回っており、他の領域は、全国と同程度であった。 ・短答式の問題形式は、全国平均正答率より高かった。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・「32, 40」の二つの数の和が9の段の数になるわけを、分配法則を用いた式に表す問題の正答率が全国より高かった。	
	努力が必要な問題	・メモの情報とグラフを関連付け、総数や変化に着目していることを解釈し、それを記述する問題の正答率が全国より低かった。	
理科	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率を「A 物質とエネルギー」の「物質」は上回り、「B 生命と地球」の「生命」は下回っていた。その他は全国と同程度であった。 ・無回答率が全国平均より低く、大半の問題において、無回答率0(無解答者無し)である。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・質量保存の法則を、食塩を溶かして体積が増えた食塩水に適用する問題の正答率が全国より高かった。	
	努力が必要な問題	・食塩水を熱したときの食塩の蒸発について、実験を通して導き出す結論を書く問題に課題が見られる。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・「今住んでいる地域の行事に参加している。」と答えた児童の割合は、全国の割合より20ポイント高かった。今後も地域行事について紹介することで参加促進を図りたい。 ・「家で、学校の宿題をしていますか。」に対し、ほぼ全員の児童が宿題をしていると答えた。今後は自主学習ノート等の取組み例や方法を紹介して、より主体的・計画的に家庭学習ができるように働きかけを行う。 ・「授業では、先生から示される課題や、学級やグループの中で、自分たちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいた」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」と答えた児童の割合は、昨年度の全国学力調査や5学年で実施した北九州学力調査より上昇傾向にあった。今後も主体的な学びとなるよう授業改善を図りたい。 ・「自分にはよいところがある」「人の役に立つ人間になりたいと思う」と答えた児童の割合は、5年時より高くなり、改善傾向にある。自己効力感、有用感を高める取組を学校教育活動のあらゆる場面で行っていきたい。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

- ① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

- 「わかる授業づくり5つのポイント」を踏まえた授業の更なる推進を図る
- 一単位時間の中で、目的を明確にしたペアや小集団等による話し合い活動を位置付け、表現力やコミュニケーション能力を高めるとともに、思考の広がりや深まりが実感できるようにする。
- 視点(「ありがとう! 助かったよ!」「すごい! ここが良かった!」「こうすると、もっと良いと思うよ!」「そうか! なるほど!」「おや! なぜかな?」等)を与えた振り返り活動を行い、学習内容を確認するとともに、自他の高まりに気付いたり、自己効力感をもたせたりする場となるように働きかける。
- 学力向上のための特設時間実施(全校一斉)及び全校での取組を徹底する。
 - ・言語の基礎的・基本的能力を高めるために毎週火曜日に全校で行っている「聞く聞くドリル」を徹底して行う。
 - ・算数の基礎的・基本的内容の習熟を図るために、「基礎・基本定着問題」または「診断問題」を毎週金曜日に全学級で実施する。
 - ・漢字を読む力の向上と学習意欲の喚起を目指し、国語科の授業の中でフラッシュカードを全学級で活用する。
 - ・週に1回以上漢字の書き取りの小テストを全学級で実施し、漢字を正しく書く力の定着を図るとともに、スモールステップで行うことで自信がもてるようにする。
 - ・給食準備時間を活用し、算数の基礎的内容の定着を図るための学習を指導方法工夫改善加配教員と児童生徒支援加配教員等が行っている指導を継続実施する。
- 本市教育委員会作成の単元末テストを継続して実施する(4学年以上)。
- 過去問題、アシストシート、活用力を高めるワークを単元末に位置付けたり、冬休み、春休みの「家庭学習」として活用したりする。

② 家庭生活習慣等に関する取組

- 家庭学習の意義や取組状況等について、通信・懇談会等、あらゆる機会を通じて家庭や地域に情報を発信する。
 - ・学年×10分を家庭学習の時間の目安として設定していること
 - ・宿題以外の家庭学習について具体例(家庭学習チャレンジハンドブック等)の紹介
 - ・「家庭生活・家庭学習がんばり表」を定期的 to 実施し、家庭学習や規則正しい生活の習慣化を図っていること
- 継続して、生活習慣・生活態度の見直し・改善について、家庭へ働きかける。
 - ・テレビ等の視聴とゲーム・携帯などの使用に関して、家庭でルールを決め、徹底するように、通信・懇談会等、あらゆる機会を通じて保護者に働きかける。
 - ・規則正しい食生活や基本的な生活習慣の定着、生活時間の見直し・改善等の大切さや必要性について、学級通信や懇談会等を活用して情報を発信するとともに協力を依頼する。
 - ・学校のきまりの遵守の徹底と家庭への周知を図る。